

研究実践報告

徳本報告への応答

——私の生活と仕事——

松浦（大坪） 雅美*

A Response to TOKUMOTO Report:
My Life and Work

Masami MATSUURA (OOTSUBO)*

はじめに

小文は、徳本達夫会員の論文「保育者教育考(3)」(『広島文教教育』第34巻、2019年所収)への応答である。昨年12月中旬に送られてきた本学会誌を手にし、目に入ったのが徳本報告であった。教育学ゼミの担当教員であった徳本報告を読み、自然に感想を書きたくなった。手紙がほぼそのまま原稿になり得るという発見は、筆者には嬉しい驚きであった。以下はそのメモをまとめたものである。

育休中とはいえ、家事と初めての子育てで時間があつという間に過ぎていく。20分、30分と、隙間時間を使って、今まで考えてきたことを思い起こしながら計10時間以上で入力した。卒業後の6年間の生活と仕事を通して、日頃から思っていたことが、徳本報告という一つの刺激と出会うことで形となった。

後に触れるが、筆者は教員生活の中で自分の思いを言葉にできず、行動そのものを誤解されてしまう児童と出会ってきた。彼らも内に秘めた思いは多々である。担任として関わりながら、

それが自然な形で表現できるような一つの刺激として筆者自身が存在していたかどうかを振り返ることに繋がった。

応答は自然にあふれ出たものが本心である。結果として、推敲は最小限となった。小文は、筆者自身の中で少しずつ育ってきていたものが徳本報告を契機に誕生したものといえる。以下は、徳本会員への応答である。

1 広島文教教育への投稿について

ゼミ生に声をかけたところ、2人から書きたいとの返事がありました。ただ、時間的に厳しいとのこと。私も育休中とはいえ、『広島文教教育』に出される方々が時間をかけて執筆されている中で、数日で書いたものを投稿するのは気が引けます。また、子どもも行動範囲が広がってきたため、寝ている時間などを紡いで書いています。書くならば、先生からの手紙にもあった、大田（大田堯『教育とは何か』岩波新書、1990年）をもう一度今の自分のこととして読みたいと思い、読み直し始めたところです。もう一年猶予をいただきたい、というのが投稿についての答えです。延期したところで、内容のあるものになるかと言ったら自信はないので

* 広島県内公立小学校教諭、本学科第31期生

すが、書きたい気持ちも応えたい気持ちもあるので、ぜひ書かせていただきたいです。しかし、今回はせつかなのですが、ご遠慮させてください。手紙の返事を遅らせておきながら申し訳ございません。【追記：その後、徳本会員より連絡をもらい、励まされ、自ら納得し、投稿を決意した。時間の長短の問題ではない。書きたいこと、伝えたいことの有無、その度合いの問題。書く過程でこれらが明らかになるということ。表現は自ずとついてくる、と徳本は強調した。】

以下、返事のあったゼミ生の言葉です。

A 教育現場に立ち、4年が過ぎたが、理想と現実の違いを感じている。理想に近づくためにも学び続けなくてはならない。広島文教教育に書きたいと思う議題（コロナ禍における教育及び職員・組織の対応、社会から見えた教育&中から見える教育、教員の多忙、学び続ける教師像、学びたい気持ちと時間の限界、教師だけど一人の人間、子どもに伝えたいこと、教師という仕事の未来）。考えたいことはたくさんあるが、現場での職務に精一杯なのが現状。ゆっくりと向き合っていきたい。

B 私は、書かなければいけないと思う。特別支援について研究した卒論に関して特に。卒業後、担任として経験したことは卒論にとっても関係していたから、卒論の続きとして書きたいことがたくさんある。でも、時間的に厳しい。期限は必要だけど、もう少し時間が欲しい。

他3人は、転居・入籍等諸般の事情により、書くことは厳しいようです。

2 近況等

(1) 仕事について

前任校で初任の4年間を終え、2年前から現

任校に勤務となりました。

前任校では、2年生→1年生→1年生→1年生の担任をしました。低学年しか担任させてもらえないという意味を考えた方がよいと同僚に言われたこともありましたが、私自身は1年担任に誇りをもっていました。1年生ほど目まぐるしい成長を見せてくれる学年はないのではないかと思います（担任の力量によると思います）。【追記：それだけ目まぐるしい成長を任せることのできる教員であったということ。任命者は目が高い、と徳本は電話で返した。筆者の心と今までの自分が救われたような気がした。】

3年目に出会った校長先生のおかげで、自分で考えて動くことができるように成長したと思います。その校長先生がいつも言っていた「感謝」と「寄り添う」。担任していた児童を見ると、学校で私にたくさん話しかけてくる子もいれば、なかなか話ができない子もいました。特に「問題行動」と捉えられてしまう行動をとってしまう子は、注意ばかりになってしまい、本当のその子自身を見ることができません。寄り添えているのか？たくさん悩みました。小さなことでも見落とさずに声をかけることはもちろん、下校指導と称して、なかなか話ができない子や「問題行動」をする児童と一緒に家まで歩きました（集団下校だったので、特別扱いではなく、順番に）。話しながら一緒に歩いて帰る中で、「問題行動」をしていた児童は、家庭環境に厳しさを抱えていることが多いと感じました。話を聞いて欲しい、褒めて欲しい、僕を見て欲しい。でも伝え方が分からないのだと気づきました。問題児ではないのです。ちゃんとその子なりの考えをもっているのです。でもうまく表せないのです。どれだけの周りの大人がそのことに気付いているのか、悲しくなりました。学校にいる年配の先生は「変なやつだ」と言い

ます。それに私は反論できませんでした。違うのに、違うと否定することができず、その代わりにこんな良いところもあるんだと伝えることしかできませんでした。【追記：セーフティーネットの一つである義務教育諸学校の教員の役割は大きい。その役割をしっかり果たしたい、と徳本。悲しくなつて終わらしてはならない。だからこれを書くことで発信する。周りが気付くことができればその子にとっての助けになるかもしれないが、それだけではなく、その子自身も発信できるような力を付けなければ生き抜いていく力にならない。とりわけ、昨今、感情を言葉や文章等で表現できる力を身に付けるように育てていない子が少なくない。そのような力を付ける関わり方が全ての大人に必要となっている。筆者はその練習として日記を大切にしてきた。1年生には週に2回日記の宿題を出し、自分の感じたことや思ったことを表現することを大切にしてきた。授業を通して書く力を付けることはもちろんだが、苦手な児童に対しては、ヒントカード（何をした・思ったなど書いたらいいことが思いつくようなものを書いてい）を使用したり、コメントに質問を書いて答えてもらう取り組みをしたりした。】

中堅から若手の先生の間では、厳しいことも言い合える切磋琢磨できる関係がありました。しかし、年配の人にはなかなか言い合えることはできませんでした。そんな環境を変えようと奮起する先生もいました。「中堅の僕達がよい職場を作っていない」と。その先生が中心となって、大きな若手の渦ができていったように思います。やりがい、挑戦する、組織として動く…改革が進むにつれて、あたたかい雰囲気の中にピリッとした緊張感のある職場になってきました。

4年が過ぎ、小規模な現任校に転勤になりま

した。市町が変われば、すべてがガラッと変わり、現任校での1年間は本当に大変でした。初めての高学年担任。5年生という多感な年頃。クラス替えもないので保育所からの人間関係がそのまま。私が出会った頃には既に人間関係ができ上がっていました。保護者同士の人間関係がそのまま子どもに。地域特有のよそ者は除外しようという雰囲気を感じました。目の前にいるのに子ども達を遠く感じ、どうやって寄り添えばよいのか、分からなくなっていました。ヒエラルキーがすでに形成されていた人間関係をどうにかしたかった。話を聞けば聞くほど溝が深まってしまった。保育所や低学年の頃の話をする子どもも多々いました。そんな日々を送る中、怒涛の行事ラッシュ。行事を通して互いの良さを見つけることができたのは良かったが、結局また過去にとらわれてしまい、根本的な解決には至りませんでした。【追記：行事を通して良さを見つけることができたのは、新しい関係の材料になったに違いない、と徳本。その他にも、テーマを決めて友達のよいところや成長したところを見つけて伝える活動を行った。児童一人一人とコミュニケーションが取れるように、毎週日記を出し、ページが埋まるほどコメントに力を入れた。その甲斐があったのか、今まで内に秘めていたものを話してくれる子ども出てきた。】

それでも、最高学年に向けて任されることが多くなってきたことで、責任をもってやっという子ども達の意欲が芽生えてきました。【追記：大田も言うように出番が与えられると、人は本気になる。学校はそのような価値ある出番を創り出すことができる社会機関の一つである。】そんな中、コロナ禍によって突然の臨時休業。子ども達の気持ちも宙ぶらりんになってしまった。私はあの子達の担任として何もできな

いまま、6年生へと送り出した。自己肯定感を下げたのではないかと考えています。彼らにとってかけがえのない時間なのに、十分なことをしきれなかったことを今でも悔やみます。

4月から、自閉症・情緒学級の担任になりました。3年生男児1人と5年生から入級した男児2人の計3人。昨年の1年間、隣の教室でしたが、毎日怒られ、怒鳴られ…。とにかく自己肯定感を上げたい。あなたがいてくれるだけで嬉しいんだよと伝えたい。そんな思いでスタートしました。一度も叱ることはありませんでした。教室に花を摘んできてくれる。準備が遅い友達を手伝う。話し合いのメモを率先して取る。私がサンフレッチェを好きだと言ったら、図書館でもらったサンフレッチェの葉をプレゼントしてくれる。叱る言葉ではなく、「ありがとう」「嬉しい」など、私の口からは温かい言葉しか出てきませんでした。でも一緒に過ごせたのはたった1週間。コロナでまた休業。私は5月には産休に入る。あとは分散登校で会えた数日。でもその数日の中でも多くのよい所を見つげられた。本人達には伝えられ、それを他の人に知ってもらいたかった。

「中堅の僕達がよい職場を作っていない」と言ったあの先生のようによい職場にしていきたい。新しい案も「今まで通り」が大切にされた。「すべては子ども達のために」が、スローガンでありながら、どこまで実現されているのか。

ここまで書くと、職場への愚痴ばかりですね。自分自身の力と経験不足が一番なのですが。【追記：それもあるが、お互いの力量を発揮し合える職場かどうかが問題。今回の投稿は復帰後の実践に生きてくるはず。引き続きの自己研修を、と徳本。】

(2) 出産について

昨年の5月から産休に入り、7月に子どもを産むことができました。私が出産した産院では、ソフロロジー式分娩法が取り入れられており、合言葉は「世界一幸せな出産」でした。その先生と出会うまでは、陣痛も出産も怖くて痛くて命がけのものと思っていました。人間の思い込みというものは怖いもので、何の経験もしていないのに、そういった思い込みで痛みも怖さも倍増するそうです。

その先生と出会って私の意識改革が始まりました。出産は母と子の初めての共同作業。出産の主役は母と子。だから、自分がどんな場所でどんな風に産みたいのか。陣痛はもうすぐ子どもと会えるという知らせ。母が痛いのは一部だけど、赤ちゃんは全身が痛い。それならば、母ができるのはゆっくりしっかり呼吸をして酸素を赤ちゃんに届けること。

出産当日。朝4時から始まった陣痛。子どもが生まれたのは夕方5時37分。約14時間と聞くと長く感じますが、本当にあっという間でした。生まれてくる瞬間に手を繋いだり、臍の緒を切ったり…。痛くなかったと言ったら嘘にはなりますが、楽しかったです。笑顔で産みましたよ！一生忘れないと思います。

正直、母になったという実感はあるけれどないような…。ただ、目の前に我が子がいる。その姿を見て、守りたい気持ちになるのは、少しずつ母親になっているということなのだろうと思います。少しずつ子どもにも母親にしていってもらいます。【追記：子どもは親の親だということ。この発想を全ての親がもつことができれば、親子関係は好転する。その場面に関わる父親や関係者にとっても、と徳本。焦ることなく育児の時間を大切にしていきたい。】

(3) 育児について

あわただしい毎日です。世の中のお母さんは、本当にすごいと思います。

出産を終えて2ヶ月頃までは、まとまって寝ることがなかったので、心身ともにボロボロになっていました。幸せな出産ができ、子どもも愛しいとは思えるのですが、なぜか突然涙が出る。今振り返れば、自然と流れたあの涙は、プレッシャーからくる涙だったのだと思います。自分自身の手の中に私と私以外の一人の人間の命があることに大きな責任を感じました。命は大切。当たり前なのがとてつもなく大きく感じました。息をしているかな？何か詰まっていかな？夜も安心して眠れず、ちょっとした物音（赤ちゃんの息や寝返りにも）に目が覚め、電気を点けては息をしているか確かめ、また眠る毎日でした。もしこの子に何かあったら…そう考えるだけで、ひゅっと息ができなくなるような怖さでずっと戦っていました。多分これは、母親特有のものなのではないかと思います。

その他の涙は、周囲への苛立ちが原因でした。母親として強制的に子ども中心となった自分の生活に対し、夫はほとんど変わることがない。【追記：避妊する場合は別として、避妊対応なしの性交では男女ともに親になる、親としての修業を始める、親の役割を全うする覚悟をもつべきであろう、と徳本。】そこにモヤモヤとした感情を抱いていましたが、その頃の私には何にイライラしているのか、どう表せばよいのか分からず、涙として溢れていました。今は、夫とも何度も話をし、少しずつ改善しながら生活しているところです。【追記：夫・パートナーや周りの理解不足から、話し合いができなくなる母親が、産後鬱にかかることは少なくないのだから。日常的に相手と建設的な話し合いができる力を相互に身に付けていく。ここから子どもも、話

し合いを通して相互理解、自己肯定感、協働してことに当たる精神と力を育てていくのだから、と徳本。】とはいっても、子どもの成長はめまぐるしいもので、毎日かわいさを感じる一方で新たな壁にぶつかっては、クリアしていく日々です。

コロナ禍での出産・育児は、本当に閉鎖した世界にポツンといるような、世界と切り離されたような感覚に陥ります。どこで何をもらうか分からないので、母親学級などの人と繋がる場所には参加できない（中止のため）。外出自粛。どうしても出なくてはいけない時は、消毒液を常に持ち歩き、人混みなどを避ける。もしコロナにかかったら、誰がこの子に母乳の代わりを与えることができるのだろう。幼い子は重症化しないというが、死亡した子もいるという。守らなくては…。いろんな情報が錯綜する中で生活です。

私は運のよいことに、隣人も1週間違いで子どもが誕生したので、一緒に散歩をしたり、育児についての情報交換をしたりしています。真っ暗な中に、明るさがともったような気がしました。人は一人では生きていけない。つながりの大切さ。温かさ。偶然なのか必然なのか、私は出会いに運があるようです。

3 徳本先生の文章を読んで

(1) 「主体的な学びは身体全体を総動員する」

まず、この言葉に共感した。近況報告で少し触れたが、主体的な学びは、言葉では言い表せないぐらい、全身が喜んでいることを感じる。前任校での教員生活で、司書教諭として行った図書室の改革、からだ部として行った避難訓練（火災、地震、津波、不審者）、1年生担任として行った保幼小との連携など、たたき台を考え、諸先生方に提案し、先輩方の経験を聞く中

で今まであったものを更によりものにしていくのは、本当に楽しかった。本気でやり遂げる中で見つけた課題を次の年への改善案として改良していく。主体的な学びを子ども達に求めるのであれば、その手本として教員がそうあるべきだと思う。成長しない人に魅力はない。と自戒を込めて記す。

ルールの上をゴールに向かって走っていくのではなく、子どもの眩きを捨て、遠回りでも子ども達の声で答えを導き出す。何が正しいかは分からないが、自分達で頭をフル回転する中で答えを出していくことが求められる。

現職場のベテラン教諭は、「学びのトランポリンに全員が乗ること」が絶対条件だという。トランポリンに乗っていない子がいたら、教師ではなく、仲間が救い上げる。「なるほど」「分かった」と同じ土台に立って考えることで、その学びが相乗効果を呼び、学ぶ楽しさ、大切さを感じ、よりよい学びに繋がる。だから、階段ではなくトランポリン。言葉で言うことは簡単だが、実際は容易なことではない。学びのツールの活用やコの字型の席順、グループでの活動、意図的指名や視覚教材の活用…。各学年での積み重ねが、高学年でのより深い学びへの土台となる。どうやったら導入から子ども達に課題をぐっと引き寄せられるか、様々な手段で考える。主体的な学びには、自分が体験したことと課題に対する問題意識が必要不可欠。その仕掛けを指導者は子どもの実態を把握しながら具現化しなくてはならない。学んだことだけではなく、学び方自体が、子ども達の未来を助けるかもしれない。昨今、強調されている「主体的で対話的な深い学び」である。

(2) 「実践者は自身の実践を対象化する作業を通して自己更新を続ける」

多忙な中で、どれだけの時間を割いて自省し、成果と課題を整理することができるか。更に新たなことを学び続ける。これができたら、質が高まっていくだろう。しかし、出来ないのが現状である。

少し話が逸れるが、私自身、入籍してから半年間は、居住地から勤務校まで1時間以上の時間をかけて通勤をしていた。電車・新幹線・車を乗り継ぎ、毎日がクタクタだった。職場の近くに住み続ければよい話ではあるが、それができない事情もある。転勤して現任校へ。ここでも1時間以上かけて車通勤。毎日がヘトヘト。単身赴任で仕事をしている人や、私と同じように1時間以上かけて通勤している人も少なくない。この時間がもったいない！！通勤時間中(新幹線など)に教材研究等も行ったが、この時間で教材研究、担当分掌の起案文章の作成、何でもできるのに！！！！と、何度も思った。

多忙なことは事実である。そんな中でも鍛錬を積み重ねている人がいるのも事実である。前任地で働き始めた頃には、時間外労働が80時間を超えたら管理職から指導が入っていた。誰に言われたわけでもなく、時間外労働の時間を改ざんして報告する人が多かった。少しずつ働き方改革が進み、1月の時間外労働時間を45時間以内にするようにと、教育委員会から前任地の全学校に指導が入った。それを受け、校長は、更に働き方改革を行った。研修を必要最低限にするなど本当に必要なものだけが精選されていった。それでも月45時間以内は厳しい。改善せず、達成できるのは、仕事量が少ない人か、家に仕事を持ち帰る人だけだった。負担は減らない。更に、仕事はできる人に振られる。多忙な教員は更に多忙に。ただ時間的縛りができた

だけ。それでも、前任校はまだ働き方改革が進んでいた方だった。現任校は、1人1つずつ鍵を配布され、土日に来てもよく、平日も何時までも仕事をしてもよかった。日を跨ぐこともあった。時代の流れに少しずつ追いつき、鍵を回収され、帰る時間も厳しくなったが、前任校の比じゃない程の仕事量は変わることがなかった。“今まで通り”で、働き方改革は進まなかった。【追記：それでも現任校もまだよい方。違う地域で働いている友人は、今でも日を跨いで帰ることもあるそうだ。それを便利だと思っている友人に共感するところもあったが、強く危機感を感じた。】

一つ一つの研究授業に力を入れて、数より質の前任校。研究授業に力を入れるよりも、日々の授業に力を入れるよう、互いに授業を見合った。質も求めつつ、数をこなして力を付けようとする現任校。現任校で私が行った研究授業（公開研も含む）、1年間で8（総合4、道徳2、英語1、家庭科1）。指導案は、たたき台が前年までに作られているものもあるが、児童の実態は全く違うので、手本としつつも一から作り上げる。特に3学期の1・2月は恐ろしかった。授業研3つに加え、5年生だけに降り注ぐ山のような行事。地域の方への感謝の会、6年生を送る会や卒業式（コロナの影響で、卒業式は5年生の代表のみの出席になった。）、食育体験2つ。学校に行くことで必死。子ども達の楽しそうな姿、地域の方や6年生のために試行錯誤する姿に励まされ、何とか頑張ることができた。けれど、あまりの忙しさにほとんど記憶に残っていない。多忙化は記憶をも臍にってしまう。力を付けることは大切だと強く思う。それを当たり前のように初任から経験してきた若手教師。ここぞという授業の時に魅せる授業をする。子ども達の生き生きと学ぶ姿を見ると、日々の積

み重ねだろう。しかし、1つの研究授業に力を入れることを初任校でしてきた私は、毎週のようであった研究授業に追われる毎日に、こなすことで必死だった。更にガラッと違う授業スタイル。慣れることに必死で、自分のものにできずに取り組むことも。本当に形だけ。もったいない時間を過ごした。授業に力を入れることができるのが職務の一つだと思う。しかし、それに十分に時間を取れないのが学校現場での現実。研究をする時間が確保されているわけではなく、山のように次から次へと降ってくる仕事。やりたいことも十分にできないまま過ぎる日々…。優れた実践を聞きに自主的に参加した研修会で学んだことも活かせぬまま…。あの1年は今までで一番悔やむ1年だった。

今の職場で、本当に力のある先生を見ていると、時間外労働が多い。普段の授業も質を保ちながら、任された仕事もする。それは、毎日朝早くから夜遅くまで働き、仕事を持ち帰り、加えて土日仕事をしに学校に来るという時間外労働で補われていた。栄養ドリンクを飲みながら頑張る姿。体を壊してもおかしくない状態。それも分かっているがみんな頼る。私はというと、妊娠が分かってから、職場ではあれしてはダメ、これしてはダメ、早く帰れ…。心配してもらっていることも分かっているが、できることが狭まり、やりたいことも更にできず、息苦しい日々だった。様々な制度があるとはいえ、人手不足により、他の先生方にかかる負担も大きい。妊婦に対する制度だけでなく、様々な制度を十分に活用できている人がどれだけいるのだろうか。申し訳なさやクラスに対する責任感から休暇を取ることをためらう人もいる。強制的に取らされた休みも、記録の上だけで、実際は出勤している人もたくさんいる。働き方改革が進みつつあるとはいえ、まだまだ教育現

場の課題は山積みだ。

多忙であるとはいえ、自分を客観視し、自省することは本当に重要だと思う。今自分はどこに立っているのか。見つめ直すことが、目の前の子ども達への教育につながる。その大切さも分かっている。分かっているけれども…と苦しむ。まずは多忙な職場環境の改善を。

育休に入り、働くことから距離を置いて見えることもあった。今ある時間を使って書きたい。ここで自分を見つめなおし、振り返り、次へとつなげるためにも私は広島文教教育を書くべきだとも思った。【追記：実践しながら自省していく。自省しながら実践していく。省察的实践家であり、実践的省察家である。日々の生活も仕事も、常に省察することを自覚しながら取り組んでいきたい。今回の投稿はその第一歩となるに相違ない、と徳本。】

(3) 「山城実践への応答」への応答

①保幼小の連携の実際

3年間1年生担任をして感じたこと。小学校教諭は保育所・幼稚園・こども園に対しての理解や関心があまりない人が多かった。保幼小の連携に力を入れていた前任校の中学校区でさえも、1年生担任経験者以外はあまりその重要性を感じていなかったように感じられた。保育者の観察力・きめ細やかな乳幼児との接し方・たくさんの工夫が施された環境設定・保護者との密な連携など、学ぶべきことはたくさんある。【追記：子ども理解とは眼前の子ども理解にとどまらない。生育歴・学習歴の中で子ども理解。ゆえに幼児教育に対する理解や関心は不可欠、と徳本。】

現在、実際に保幼小へ教員が足を運び、保育の現場を見させてもらったり、保育活動に参加させてもらったりする小学校も少なくはない

(と願いたい)。少なくとも私が勤務した学校は全ての教員が保幼小に足を運び、観察させてもらった後に一緒に食事を作ったり、遊んだりしてその実態を目の当たりにしていた。低学年の担任をしたことがない先生や高学年の担任の先生は、後に述べる山城実践のような質の高い工夫や丁寧さに驚きを隠せない様子だった。学校間の垣根を取り払い、一緒にその子のための教育を共有・考えていくことがさらなる連携の質を高めていく。総がかりの子育て・教育である。中学校も然り。その連携は子どものためになる。多忙の改善は急務だが、多忙という現実承知の上で、保幼小中学校間の連携・協力を推奨していくことは必ず必要だ。

②「山城実践の特徴と意義」で考えたこと

「子どもと一緒に考えること、先取りしないこと、そのためにも子どもと同じ目線で考える」という言葉から、現任校に転勤してきて、特に言われたことを思い出した。意図的な班構成・席順は、思ったことを相談したり、言い合ったりできる環境づくり。グループ活動では、教師は入らない。子ども同士が意見し合う。話し合っていることがズレていたら、それは本時の課題がしっかり共有されず、同じトランポリンの上に乗っていなかったということ。すぐさま全体で軌道修正をする。「活動のなかでの子どもの「困り感」は創意工夫の種となる」これが共通の課題を認識するために必要なもの。「一人の疑問や問いかけを他児や集団で共有する保育は、回答の共有、理解の発展を生む。」今までの活動で出てきた困り感や、初めて取り組む課題に対しての困り感の共有。課題に取り組む中で、小さな疑問やズレはすぐさま子どもの言葉として全体で共有する。「学び合い」。子ども主体で学びを深めていけるように、教師はサポート役・

ファシリテーターに徹する。

「臨機応変な関わりを決め手になるのが状況判断力・見極めの力であり、著者は同僚の保育の観察、自身の実践の振り返り、同僚への質問、等を通して、その力を養う大切さを指摘する」。ハツとなる。前勤務校校長は「感性が大切」と何度も言われた。私の感性は少しズレているらしい。自分ではなかなか自覚できなかった。私と同年の子は、「感性がよい」と褒められていた。確かに…と思うことも多々ある。この「感性」が、山城のいう「状況判断力・見極め力」を支える大きなものではないだろうか。（最初は感性＝状況判断力・見極め力とも思ったけど、それは少し違うような気もする…。）「感性」は、それこそ、これまで経験してきたことで形成され、個人差の大きいものであり、人それぞれだと思う。何が正しいのかは分からないが、山城が言うように、状況判断力・見極め力と同様、「感性」も努力次第で養えるのではないだろうか。「感性」を研ぎ澄ませて、しっかりとアンテナで状況等をキャッチし、何が大切なか見極めていく。そのためにたくさんの優れた実践から学び、自分では経験したことのない人生を送っている他者と交流し、学び、吸収し、自己更新していく必要がある。

「自分のことと置き換え考え始める」「点・線・面・立体へと発展する学び」「子どもが主題に深く入り込む姿」「子どもの実態に即した最適な資料提示をめざす姿勢」 社会事象との出会わせ方。私は、2015年8月20日に経験した平成26年8月豪雨（集中豪雨による広島市北部の土砂災害）を忘れることはない。小学校で働くようになり、担任している子ども達に体験したことを毎年伝えてきた。「え…怖い…。」「先生大丈夫だったん？」「先生が住んどった所どうなったん？」と、低学年に話した時の反応。経験した

ことがないことを、自分の想像力をフル回転させ聞いていた。やんちゃ少年も静かになって聞いていた。保護者の方と会った時に、家に帰って話してくれたことや、もしもの時にどうするか一緒に考えられたということも聞いた。当たり前の日常が当たり前でなくなる時が何の前触れもなく訪れることがあるかもしれない。そんな時にどう行動するか、自分事として考えるきっかけになってくれたら、私も嬉しい。

問題はここからである。昨年担任した5年生に写真（あの時は、写真に収める気持ちにはなれなかったの、知り合いに譲ってもらった）を見せ、私が体験したことを話した。幼い頃からこの集団の中心的立場になっていた子が話の終わりに、「先生は死ななかったんですか」と。衝撃だった。え？と耳を疑う。写真も見えて、話を聞いてこの反応。理解力が低い子でもない。決して言うてはいけないことを分からない子でもない。さすがに周りの児童もシーンと静まる。私は、「そうだね、だからこうしてみんなに会えたんよ。」と答えた。私の資料提示が適切でなかったのだろう。選んだ言葉が良くなかったのだろう。重さが5年生のあの子に伝わらなかった。と同時に、その子の闇も感じた。今思うと、私はその頃からその子のことが怖くなったのだと思う。向き合っているつもりだったけれども、どこかで逃げていたのかもしれない。だからその後もその子との距離が縮まることはなかった。私の一番の反省点。背負っている闇に寄り添うことができなかった。

【追記：言葉のままの意味だったのか、災害で多くの人が亡くなる中で、筆者がなぜ助かることができたのかを聞いたかったのか。その言葉の前後から言葉に隠された本当の思いを読み取り、返す。あの子が言った言葉は大事なSOSであったのかもしれないと今になって考える。その子

にもっと語らせたかった。】

その後の関わりの中で子ども理解を深め、最適と思われる関わりを深めていくことが筆者にとっての課題である。

③「山城実践から学ぶこと」で考えたこと

「実践の質は生育歴のなかでの体験の総体」。共感。自分が経験し、考えてきたものが土台にあるのは大前提。

「教育の成果は長期的視点が必須」だが、周囲から求められるのは短期間で出るものかつ数字として分かりやすいもの。

「職場の雰囲気」は、教育の質の向上にもなると考える。よく、親同士の関係が子の関係になっていると耳にするが、それも間違っていない。学校においては、教師個人の生育歴や教師同士の関係、教師の学ぶ姿が子ども達に強く影響を与えていると考える。家庭の与える影響はとても大きいが、教師自身も影響を与えているともっと自覚をもって教育に取り組むべきだ。子どものせいにするのではなく、教師自身があらゆる角度からの学び合いをすること。(研究授業の時だけでなく)日頃からそれができるプロとしての高い意識をもち、愚痴の共有ではなく経験の共有ができる集団・環境。それができる職場にしていくことが、今の私の目標である。もう若手ではない。中堅として自覚をもち、これから入ってくる私よりも若い人達の力を十分に伸ばすことができるような職場の環境・関係にしていく。これが私の責任だと思う。そのためにも、まずは自省ができる時間を作ること。時間は有限。その中でどれだけ質の高いものを効率的に行っていくか。自分との闘い。周囲と助け合いつつ、更新をしていくこと。これから出会う子どもたちとその未来のために。

④「おわりに」について

「セーフティーネットの一つである保育所において保育者が果たし得ることは無限である」。小学校も然り。「保育の質保障は社会的損失を未然に防ぎ、社会利益を未来に生む」。長期的な視点で、彼らが将来壁にぶつかった時、しんどくなって倒れた時、自分の力で乗り越え、立ち上がれるように、彼らの未来を見つめた教育を。立ち上がる方法は多様。しかし、自分一人だけで解決することはない。必ず誰かの力や思想などが助けになる。【追記：これを実感できると自死はなくなる、と徳本。】少なくとも私はそうだ。

「人はその実年数分の責任を時代や社会・未来・過去に対して負っている。(中略) 生き方の多様性・家族像の多様性でもある。生物多様性という、生態系の理の人間への応用である」。28年分の責任がずっしりと。あ、大田の本を読まなくては。深く読み込まなくては。まずは自分の根元に戻ろう。もう一度見直そうと思った。【追記：次回投稿することがあれば、その成果を示したい。今回は自然な応答を綴ることにした。】

4 おわりに

久しぶりに活字をじっくり読みました。久しぶりにパソコンに向かいました。久しぶりに自分の思いを誰かに記しました。【追記：思いを伝えたい人が存在することが人を高める。強くする。優しくする。賢くする。美しくする。そのような出会いを日々の実践で形にしていきたいと、徳本。】

文にしながら、ああ、私も愚痴ばかりで行動できていなかったのだと反省。言うは易く行うは難し。重い腰は思っている以上に重いです。理想はたくさんあるけれど、実行するに

は膨大な気力と体力が必要。さあ、ここからだ、
と思ひながら育休中はまずは我が子としっかり
向き合おうと思っています。時間を作りながら、
じっくり復帰に向けて準備をしていきたいと思
います。

きっと先生から声をかけていただかなければ、
だらだらと時間が過ぎていたと思います。声を
かけてくださり、ありがとうございます。時間
をいただければ、内容を整理し、深めることが
できると思います。ゼミ生も様々な思いを抱え
ているようです。大学の時のように話をすること
はなかなかできませんが、リモートなり、
メールなりでまた議論できたらと思います。

全国的にコロナで生活様式は様変わりしまし
たが、まだまだ危機的な状況です。意識の温度
差も感じます。何とも言えないモヤモヤを抱え
ながら、大切な人達や医療従事者などに迷惑を
かけないよう、自粛を続けていきたいと思いま
す。【追記：筆者自身が特別高い意識をもってい
るわけではない。手洗い、うがい、消毒、マス
ク、密を避ける等、自分にできることをしてい
る。気付かないうちに、配慮に欠けた言動もあ
るかもしれない。】

おわりに—今後の課題に代えて—

以上が徳本への私信である。その後にはじめ
にとおわりにを付け加えることによって論文と
いう形式にした。

ものごとを進めるには時間が要る。書きたい、
応えたいという思いが形になるという現実を体
感している。卒論ゼミで味わっていたものと同
じものがある。ゼミ生と担当教員に伝えたいと
思ってレポートを書く。相互のやり取りをする。
新しい発見の数々。それが次のレポートの材料
となる。自分の中にあったもの、自分では気づ

かなかったものが次々と生まれてくる。それを
自分の言葉で表現する。ゼミ生の生育歴や学習
歴がお互いに共有されていく。お互いが支え、
支えられる関係に。学び合う関係が確かなもの
になった。これが筆者が味わったゼミでの学び
であった。

筆者にとって、卒業後6年間の生活と仕事を
振り返る契機となった今回の徳本報告。小文は
「応答する身体」（徳本）を生きる証として私達
の新しい生命に、また、これまで出会ってきた、
そしてこれから出会う多くの人々への発信であ
る。（2021.1.22核兵器禁止条約発効の日）
付記：ひどい天候でない限り8カ月になった息
子と、毎日1時間ほど散歩をしている。まだ言
葉を発することのない息子を抱っこしながら
ゆっくりと歩き、優しく話しかける。このゆっ
たりとした時間の流れの中にいるからこそ、今
までの自分を客観的に振り返ることができたの
かもしれない。

渦中にいれば感情的になり、「腹が立った」
「悲しかった」で終わっていたことを、振り返
り、必ず応えてくださる存在に発信することで
見えてくるものがあった。感情だけで終わらせ
てしまうと、本質が見えてこない。しんどいこ
と・辛いことこそ時間はかかってもしっかりと
向き合うことの重要性をゼミで学び、そして現
在も感じている。今まで経験した、嬉しかった
こと辛かったこと、そのすべてがあったからこ
そ、今の自分がある。それを振り返ることで、
自己更新されていくのではないだろうか。そし
て、自己の中だけでとどめるのではなく、発信
すると、応答してくれる人がいる。それを受け
取るとまた世界が広がる。

焦ることなく子どもとともに成長をしていき
たい。